

「種山ヶ原はいま⑬」

種山ヶ原を訪れた人たち③ -1

ロジャー・パルバース (米国生まれ 国籍 豪州)

NHK「100分 de 名著『銀河鉄道の夜』」のロケで2011年種山ヶ原を訪れています。著書「星砂物語」他翻訳も含め多数。

1983年 映画「戦場のメリークリスマス」の助監督 (監督大島渚)

2013年 第19回野間文学翻訳賞「雨ニモマケズ」

2015年 井上靖賞

2021年 第18回宮沢賢治賞

1967年日本を始めて訪れた時、ある大学教授に「日本の中で一番美しい日本語を書いているのは誰ですか？」と尋ね、「宮沢賢治だ。」と教えられたとのこと。そして、読んだ童話が「ざしき童子のはなし」だという。

彼が岩手を初めて訪れたのが、1969年。その時、宮沢賢治の弟清六さんに会い、それ以来長い付き合いになったようです。



ロケ場所の一つ

初めての翻訳が「銀河鉄道の夜」。NHK ラジオで長岡輝子(岩手県出身)の朗読を聞いてからだという。最初は作品が発する音色に圧倒されたという。賢治の小説や詩には、擬音語や擬態語が多用されているだけでなくたまに東北の方言もそのまま使われているから、言葉に独特のリズムや音色がある。更に作品をじっくり読むうちに、彼の持つ世界観や道徳観にも強く興味を抱くようになったからだという。(「NHK『100分 de 名著』」より)

彼は「銀河鉄道の夜」は、妹トシを失った悲しみから生まれたものだと言っています。妹トシは自分の思いを理解してくれる同志の一人で、妹トシを失った悲しみは深く、3編の詩「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」にストレートに表現されています。何故か翌年の夏にはサハリンに一人旅をしており、翌年大正13年に賢治は五輪峠を越え人首町に宿泊。翌日水沢にある「緯度観測所」を訪ねています。その年に「銀河鉄道の夜」を書き始めているのです。その後何度も何度も推敲し、世に出たのは彼の死後で、正に生と死をテーマに描いた作品のように思えてなりません。ロジャーはこの作品が私たちに訴えたいことを次のようにまとめています。

「銀河鉄道の夜」は悲しい「死」を描きながらも、「いかに生きるべきか」という「生」を描いた物語でもある。

いかなるものも自分だけで存在しているのではなく、他とのかかわりの中でしか存在しえない。人間はその自然の分子の一つであり、永遠に互いにつながっている。そのつながりを守るために、世界を自分なりにとらえ、自分ができることは何かを問い、実際の行動にうつしていくことが大切である。

「相手の幸福のために行動すること、そうすることで自分も幸福になれる」

彼の言っている「本当の幸せ」とはこういうことなのだろうか。賢治の語っている「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」を少し理解できたように思います。外国の人間なのにロジャー・パルバースの宮沢賢治作品の読み取りの深さに感心しました。彼の英訳した「銀河鉄道の夜」を頑張って読んでみようと思います。

TVでロジャー・パルバースが寝ころんでいる所は、「賢治の森」遊歩道の入り口から右に小径を行くとコンクリート製ですが、テーブルとイスがある隠れ家的な所があり、その側の草原だと思えます。

そこは草原・森・空・雲のコントラストが素敵な所で、私の好きなキャンパスの一つです。

※人首町に宿泊し、翌朝の人首の様子を詩に表わしたのが、詩「人首町」です。下書き稿を見ると、人首の色んな人との出会いがあったようです。この詩碑は詩にも出てくる「赤い鳥居」のある通称ダンナガネ(檀ヶ丘)にあります。



詩碑「人首町」はるかに奥羽山脈



人首町写真



明治時代から 100 年以上鳴り続ける「アンジェラスの鐘」
すぐ下には坂本竜馬の従兄弟沢辺琢磨が捕らわれた番所跡



風の又三郎



春秋は雲海が



子ぎつね君は人間に興味を持ったようで

自分も他人も人間は全て同じ次元に存在するものである。従って自分はあなたであり、あなたは自分である。私とあなたは別々の存在ではなく、すべてのものはつながっている。

インドラの網 インドラ=帝釈天

=インドラの網のように

「自然と人間のつながり」

「人間は自然の分子のひとつであり、すべての分子は時間軸を越えて、永遠に互いにつながっている。だから、自分の行いは全て巡りめぐって、いつかは自分の身に降りかかってくる」

「自分は無力だ」とあきらめず、すべての人に、何かできることがあるはずです。そのためには、世界を自分なりにとれえることが必要です。そこから、自分に

